

●書学書道史学会

会 報

第 49 号

令和7年(2025)5月15日発行

編集・発行

書学書道史学会

広報局

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル7F

(株) 毎日学術フォーラム内

TEL (03)6267-4550

FAX (03)6267-4555

MAIL maf-syogaku@mynavi.jp

偶感三則

菅野 智明

ここ数年、この『会報』では2頁目以降の企画局からの案内を執筆しておりますが、本号では、ご下命により巻頭頁も執筆することになりました。以下、本学会で印象に残った体験を徒然に書き連ねました。雑駁をご容赦いただければ幸いです。

①平成29年度研究促進助成金申請に係る説明会

この年の5月、同助成金の申請を促進するために、当時の研究局が企画した単発の催事です。時に澤田雅弘先生が理事長で（この助成金制度は、澤田先生が研究局長の時に創案されたと記憶しております）、河内利治先生が研究局長、副研究局長のお一人に永由徳夫先生がおられ、永由先生の主導で運営されました。この折、私は副編集局長でしたが、永由先生の熱意にほだされ、「外部資金に関する現状と本学会の研究促進について」というテーマで拙いプレゼンをさせていただきます。今それを振り返ると、「学会事業にみる成果の偏重」を問題視し、「そこに至る経緯（舞台裏）」と「そ会員の関心事」などと述べていたようです。成果を生み出す「過程」に対し、助成金以外に何か支援策はないか、改めて考えてみたいと思います。

②将来構想委員会

ご記憶の方も多いと思います。令和3年度、同委員会の下部に3つの小委員会が設けられ、それぞれ「大会実施計画」、「研究推進」、「会則第17条検討」を課題に検討を重ね、年度内に答申をとりまとめました。これに基づき、大会はハイフレックス方式が定着し、会則17条に規定される各局体制も再編されました。一方、研究推進にあつては、「研究情報の紹介」、「研究状況の評価」、「学術交流会の企画・支援」、「研究資金の獲得・助成」、「研究成果の発信」という5つの柱を立て、それぞれの具体的な実施案を提起しています。それを踏まえ、例えば関連催事のHP広報や、例会の開催といった案は実現に至っています。ただし、実現に至らない案が多いことも事実です。これは現状致し方ない面もありますが、提起された魅力的な案の数々について、今一度実現の可能性を模索する価値はあろうかと思えます。

③東洋学・アジア研究連絡協議会

本学会とコンソーシアムとの連携も注視すべきものがあります。本学会をはじめ34の学協会が加盟する同協議会は、例年12月に総会とシンポジウムを開催しております。私は、この協議会に加盟する別の学会の代表として、一昨年度と昨年度、二度に亘りこの総会とシンポジウムに参加してきました。本学会の昨年度の大会シンポジウム「書の人文情報学」は、実はこの協議会の一昨年度のシンポジウム「東洋学・アジア研究の最前線—AIの活用と課題—」に触発されての企画でした。目下、同協議会は来秋に初の国際会議を開催すべく、加盟の各学協会に積極的な参加を呼びかけています。本学会単独では開催が難しい企画も、こうしたコンソーシアムとの協働によって実現する場合があります。特に学際的な視点ももたらされることは、大きなメリットと言えます。いみじくも上記②研究推進小委員会での答申では、「学術交流会の企画・支援」の具体策として「他分野研究者の招聘」や「学際分野との相互乗り合い」を掲げており、その必要性を訴えています。

(副理事長・企画局長)

第35回 書学書道史学会大会開催のお知らせ

企画局



今年度の書学書道史学会大会は、10月25日(土)、26日(日)の両日にわたり、奈良教育大学(奈良市高畑町)において、対面方式での開催を予定しております。開催に際しては、やむを得ない事情で対面方式による参加が困難な方には、事前にお申し出いただくことで、オンラインでの参加も可能とするように対応します。大会参加費は、対面、オンラインを問わず一般会員が2,000円、学生会員は無料といたします。

詳細および参加申込については、9月下旬に「大会のしおり」として研究発表のレジюмеとともにご案内を差し上げます。現時点での概要は以下のとおりです。開催方法は「大会のしおり」の発送の後にも変更する場合があります。最終的には学会HPでお知らせしますので、ご承知おきください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

15時15分～17時00分 シンポジウム「簡牘にみる書文化の源流(仮)」

馬場 基氏

(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長)

福田 哲之氏(会員、島根大学名誉教授)

井田 明宏氏(会員、安田女子大学文学部講師)

懇親会 於：生協食堂

10月26日(日)

奈良教育大学 於：講義4号棟 大講義室

研究発表(3～4本程度)

記念撮影、昼食

研究発表(3～4本程度)

講演「聖武天皇の書と光明皇后の書」

西山 厚氏(奈良国立博物館名誉館員)

16時30分～16時40分 閉会式

※会期中に特別展示開催 於：教育資料館

◆奈良教育大学へのアクセス

・JR奈良駅から：東口バスのりば2番発「市内循環・外回り」にて「高畑町」下車(約15分)

・近鉄奈良駅から：バスのりば1番発「市内循環・外回り」または「中循環・外回り」にて「高畑町」下車(約10分)

◆宿泊施設について

役員、会員ともに各自で手配願います。行楽シーズン(特に正倉院展開催時期)と重なりますため、お早目の手配をお願いいたします。

◆お問い合わせ先

書学書道史学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル7F (株) 毎日学術フォーラム内

TEL:03-6267-4550 FAX:03-6267-4555

メールアドレス mai-syogaku@ynavi.jp

◆理事会

10月25日(土)

奈良教育大学 於：美術・書道実習棟 書道実習室

◆大会

10月25日(土)

受付開始

奈良教育大学 於：講義4号棟 大講義室

開会式、総会

研究発表(2本程度)

12時00分～

13時00分～14時00分

14時00分～15時00分

第35回 書学書道史学会大会研究発表者募集要項

企画局

今年度の書学書道史学会大会は、右記のとおり開催いたします。会員各位には、日頃の研究成果を意欲的かつ積極的に発表いただきたく、左記の要領で募集します。

記

- ①開催日／方法：10月25日（土）、26日（日）／対面での発表を原則としますが、オンラインによる参加会員のために、電子データをご提供いただく場合がありますので、ご承知おきください。
- ②発表時間：各30分（発表20分、質疑応答10分）
- ③申込方法：Eメールにて、右記お問い合わせ先までお申し込みください。件名には必ず「書学書道史学会大会発表申込（※発表希望者氏名を付す）」と明記してください。また本文の冒頭に「所属・氏名・連絡先」を記したのちに、発表内容の題目および発表内容の要旨をレジюме（800字程度）にまとめてご提出ください。
- ④レジюме：原則として、ワープロ（テキスト形式、Wordファイル形式のいずれか）で作成し、申込時のEメールに、ファイルを添付して送信してください。
- ⑤申込締切：6月30日（月）必着
- ⑥発表者の決定と連絡：7月13日（日）開催予定の常任理事会にて協議・決定し、採否の結果は個別に連絡いたします。
- ⑦レジюме集の公開：上記の「大会のしおり」（9月下旬配付）には、研究発表レジюме集を添える予定です。この内容はホームページにも掲出いたします。
- ⑧学生会員研究発表旅費補助制度
昨年度の大会より、本学会の大会等に対面参加して研究発表を行う学生会員に対し、必要な旅費を補助しております。旅費補助を希望する学生会員は、ホームページの「学生会員研究発表旅費補助制度規程」をよく読んでください。「学生会員研究発表旅費補助申請書」をダウンロードして必要事項を記入し、右記の申込時のEメールにレジюмеとあわせて添付してください。補助の可否と補助額は発表の採否と同時に連絡します。

※注記

・大会の発表者については、学会誌『書学書道史研究』第36号への投稿申込があったものとして扱われますので、改めて学会誌への投稿申込を行う必要はありません。

・学会誌への論文投稿締切は、令和8年3月31日となっております。投稿後、原稿掲載の採否は論文査読委員会によって決定されます。

新入会員紹介

事務局

◆一般会員

飛田優樹（黒川古文化研究所）

鷲山憲彦

◆学生会員

青山涼蘭（安田女子大学大学院）

王 素（大東文化大学大学院）

金井塚理紗（大東文化大学大学院）

木村幸咲（大東文化大学大学院）

笹川元康（筑波大学大学院）

西原杏奈（筑波大学大学院）

石 放（北京語言大学）

張 鵬源（大東文化大学大学院）

戸高 海（大東文化大学大学院）

西嶋香菜（大東文化大学大学院）

林田美咲（筑波大学大学院）

平田真由（大東文化大学大学院）

古谷みか（大東文化大学大学院）

谷口美玲（筑波大学大学院）

山口明子（京都芸術大学大学院）

※令和7年1月～4月に申請された方

2025年度書学書道史学会例会のお知らせ

企画局

今年度の例会は、7月13日(日) 午後オンラインでライブ配信として開催します。例会への参加は無料です。プログラムは以下のとおりです。

13時30分

13時35分～15時05分

①13時35分～14時20分

理事長挨拶・趣旨説明
研究発表

「甲骨文字の物体に対する方向性に関する考察
—動物を中心に—」

樋口弓弦(国立鈴鹿工業高等専門学校)

②14時20分～15時05分

15時10分～16時30分

「足利尊氏の書風鑑定基準の確立」

長谷川智(筑波大学大学院)

講演

「現代書の始まり」

比田井和子氏(株式会社天来書院取締役会長)

◆講師紹介

比田井和子(ひだいかずこ)氏

比田井南谷の長女。祖父は比田井天来。学習院大学大学院修士課程人文科学研究科哲学専攻修了。株式会社天来書院を創設し、現在、同社取締役会長。同社において書道に関連する書籍やビデオ・DVDを多数発行する他、講演活動も精力的に行う。著に『現代書道の父 比田井天来』(天来書院)等。元望月町立(現在佐久市立)天来記念館館長。

◆申込方法

6月30日(日)までに、下記のURLまたは二次元コードからアクセスしていただき、必要事項を入力の上ご送信ください。例会の前日までに、参加のURLと資料等をお送りいたします。

<https://forms.office.com/r/y5s8MybJXy>

皆様のご参加をお待ちしております。

2025年度書学書道史学会例会 参加
申込フォーム



①甲骨文字の物体に対する方向性に関する考察

—動物を中心に—

樋口 弓弦

今回は人・動物を用いて論じる。物体をどの方向から視認しているか推察することで、甲骨筆記者、または製作者の視覚方向性を推察するのが目的である。よって、今回の考察材料は象形のみを用い、会意・形声は使用しない。人間をモチーフにした文字の形には、「人」「大」「天」「立」などがある。「大」「天」「立」は人間を正面から対峙し図形化したものである。これらは地面に対して水平方向であり、視覚者からは人間の面を垂直視認している状態である。

動物では「犬」「虎」「象」「馬」、哺乳類ではないが「魚」「鳥」「亀」がある。全て文字は側面であり、上から吊られている状態である。通常これらの動物は人間同士とは違い正面に対峙するのではなく、遠くから見る、または並んで歩くものである。食料としても横に寝かせて解体する。しかしながら哺乳類は四足歩行であり体を縦にする理由がある。「人」は側面を使用し、腕は左方向を向いている。先ほど提示した動物は「人」と同じ左側面であり、頭部が上にある。つまり、先に「人」が製作され、その後に「人」を基準として各動物の象形が製作されたと考えられる。

では「鹿」はなぜ立っているのか。鹿は足が下にあり、頭部が上にある。これは頭部の角が最も重要な情報であり、それを重視するならば角・頭部・胴体・足の順で並べるのが最も角を明記できると考えられたのではないだろうか。

最後に「羊」「牛」を考察する。この二つは頭部のみであり、角も明記され正面である。今までの文字は全体像を図形化しているが、「牛」「羊」は頭部のみである。ならば「羊」「牛」は頭部のみが全体像なのであろう。つまり頭部のみを祭事や装飾などに使用し、頭部は視認者に正面から対峙する格好であると想定される。そして角の違いも明確であり、「鹿」「羊」「牛」などの動物の角の造形は彼らにとって非常に重要な要素であったのであろう。

以上のことから、人間を発端として各動物に対する観察距離と方向性によって、動物の造形の決定がなされたことがわかる。

(国立鈴鹿工業高等専門学校)

②足利尊氏の書風鑑定基準の確立

長谷川 智

室町幕府を興した足利尊氏（1305—1358）は、その武将としての活躍が知られるが、和歌や絵巻などの文化をよく好んでおり、多くの書跡のこしている。

現在、尊氏手跡の主たる研究には、小松茂美『足利尊氏文書の研究』（旺文社、1999）と、上島有『足利尊氏文書の総合的研究』（国書刊行会、2001）が挙げられるが、とくに尊氏を書きえたとする書風の幅が一致しないことにより、自筆の総数やその特徴が定まらない状況にある。史料学的検討を踏まえつつも、より客観的な基準を設けて書風鑑定する必要がある。

発表者は以前、ほぼ自筆と見なされている「宝積経要品」（前田育徳会蔵、国宝）を起点に、書風の特徴から鑑定基準を整理していった。経典類より和歌遺品を対象を広げて基準を増やしたところ、漢字・仮名それぞれの基準が齟齬しないことから一定の精度を示していると思われる（拙稿「足利尊氏手跡の鑑定」『書芸術研究』第16号、2023）。しかし、走書きの多い文書類を鑑定するには十分ではないという課題がのこった。

本発表では、文書類に焦点を当て、前稿に倣いながら書風鑑定の基準を加えることを目指したい。まず、花押や署名を一覧化したうえで、年代による形変化の傾向を見いだしていく。とくに花押は、尊氏の生涯にわたって200点以上が確認できることから、精度の高い基準となることが期待される。そのうえで、説の一致を見ない「臨川寺門徒宛尊氏御内書」（天龍寺蔵）などの文書を鑑定し、自筆と判断された文書から新たな基準を考えたい。

このようにして導きえた鑑定基準は、今後新たな尊氏自筆を発見する手がかりとしても有用である。小松氏は足利尊氏の手跡について、「長いわが国の書流史の上に、比較すべき類筆は、全くない」と述べている。尊氏の真の自筆の姿を定め、武士である尊氏の文化的な側面を知る端緒としたい。

(筑波大学大学院)

講演

現代書の始まり

比田井 和子氏

太平洋戦争後、「前衛書」「近代詩文書」「少字数書」が誕生し、新しい書として注目されました。それらの創始者はすべて比田井天来門下です。それゆえに天来は「現代書の父」と呼ばれることが多いのですが、実は天来の中に、それ以前とは異なった新しい書の芸術理論が生まれていました。生涯にわたる作品の変遷や雑誌に発表された論文、書簡、門人の証言などを分析することによって、現代書の特徴と本質の解明を試みます。

1880年、楊守敬が来日し、大量の拓本や法帖をもたらしました。楊守敬のもとを訪れた日下部鳴鶴は、新たに出会った名品の数々に驚き、六朝書道を広めるとともに多くの臨書を残しましたが、すべてその時に学んだ「廻腕法」を用いており、いわゆる「鳴鶴流」を確立しました。

比田井天来は子ども頃から書の師はなく、古典を学びました。1897年26歳で上京し、鳴鶴の門に入りました。最初は鳴鶴の廻腕法を用いましたが、臨書を重ねる間にこれに疑問を持ち、新しい筆法を発見します。天来はこれを「古法」あるいは「俯仰法」と呼び、唐時代以前の筆法だと主張しました。古典本来の筆法によって臨書を重ねれば、偏見に縛られることなく書美の原理と多彩な表現を学び取り、自由な作品制作ができると考えたのです。

それでは「俯仰法」とはいかなる筆法なのか。天来の門下が考える「俯仰法」は、実はそれぞれ異なっています。実際に用いた筆法も異なり、同じ師から出たとは思えないほど作品も異なっています。天来の筆法は継承されませんでした。つまり「鳴鶴流」はあっても「天来流」は存在しないのです。

次に、著作に見られる天来の思想の核となるのは「筆意」です。この場合、「意」を筆者の意識と捉える説がありますが、天来の場合はそのようではありません。雑誌論文などからわかるように「意匠」の「意」であり、あくまでも造形的な価値を指しています。もう一つの核は「奇」です。優れた書を形容するときに使われます。反対語は「平凡」あるいは「陳腐」。「筆意」と「奇」という二つのキーワードを分析し、天来の思想と後に与えた影響について考えます。

最後に、1962年に録音された門流による座談会「天来を偲ぶ」（音声テープ）を紹介し、現代書誕生の生の雰囲気味わっていただきたいと思います。

(株式会社天来書院取締役会長)

各局報告

◆企画局

今年度の大会は、奈良教育大学を会場として、初日にシンポジウム、2日目に記念講演を企画いたしました。会員各位には、積極的にご参加いただきたく、また研究発表にも奮ってご応募ください。なお、7月の例会は、昨年同様にオンラインのライブ配信により実施いたします。比田井天来の御令孫、比田井和子先生が現代書の興起をテーマにご講演くださいます。こちらにも上記の要領では是非ご参加ください。

(局長 菅野智明)

◆渉外局

学会誌34号のJ-STAGE登載のお知らせ
 令和6年10月31日刊行の学会誌『書学書道史研究』34号(2024年)を、本年3月12日に独立行政法人科学技術振興機構(JST)運営のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)で公開し、本学会のホームページにてお知らせいたしました。今号には論文5件のほか、特集 杉村邦彦先生のご功勞、講演録、学界展望、書評、新刊紹介を掲載しています。どうぞご利用下さい。

(局長 富田 淳)

◆振興局

研究促進助成金制度について
 2025年度「研究促進助成金制度」による研究計画の募集を開始しました。本制度は、研究に専心できるよう諸手続を可能な限り簡便に設計した魅力的な研究助成制度です。ホームページに掲載されている「2025年度募集要項」研究促進助成金制度」をご参照のうえ、奮ってご応募ください。

学生会員研究発表旅費補助制度について

本制度は本学会の大会等に直面参加して研究発表を行う学生会員に対して必要な旅費を補助する制度で、昨年度の大会から運用が開始されました。遠方から参加して研究発表する学生会員の旅費負担が大幅に軽減されます。本会報3ページの大会研究発表者募集要項、およびホームページに掲載されている「学生会員研究発表旅費補助制度規程」をご参照のうえ、研究発表とあわせてぜひご応募ください。

(局長 成田健太郎)

◆編集局

『書学書道史研究』第35号の編集について
 2025年3月末日で投稿を締め切り、第35号の学会誌刊行に向けて編集を開始しました。現時点で予定している原稿は、下記の通りです。

◇投稿原稿：前号より適用の「投稿規定」「執筆要領」に基づき、全13件の投稿に対して、チェックリストとともに原稿形式を確認し「論文」12件を受理しました。規定に沿って査読を進め、採択原稿は第35号『書学書道史研究』に掲載されます。

◇記念講演録：本年度例会における比田井和子氏による記念講演および第34回大会における澤田雅弘氏による記念講演をもとにした原稿の掲載を予定しています。

◇「学界展望」：2023年度～2024年度にわたる日本領域の「学界展望」について、丸山猶計氏にご寄稿いただきます。

◇「書評」および「新刊紹介」：本誌で取り上げるべき書籍の推薦を随時(第35号掲載分については、2025年5月中)受け付けております。複数の著作候補が届いた場合には、編集局で対象本を検討して決定いたします。

【会員の皆さまへのごお願い】

編集作業の過程で会員情報が必要となる場合がございます。事務局へお届けの連絡先に変更があった場合は、速やかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

(局長 菅のり子)

◆会計局

年会費についてのごお願い
 本号に年会費納入用の郵便振替用紙を同封しています。年会費は、6月30日までにご納入ください。なお、令和7年3月現在、会費を滞納している方には、本年度分に滞納年度分を加算した金額が記載されております。速やかに全額をご納入ください。

3年以上滞納の方は、すでに導入されている「長期会費滞納者の自動退会(除籍)制」の適用対象となります。ただし、退会(除籍)適用対象者となった場合であつ

ても、退会届提出の年度分までの合算額における学会費の請求権は消滅しません。本件に関して、会員台帳別表にて管理の上、適宜納入請求を続けることが総会にて決定されていますので、予めご了承ください。

また、一般会員と学生会員とは、会費年額が異なりますので、ご注意ください。事務局の報告にもあるように、今春に学籍を離れた方は「会員変更申込書」をご提出の上、一般会員の会費年額をご納入ください。

海外在住の会員の方は、クレジットカードによる年会費の納入が可能です。クレジットカード決済を希望される方は、本紙一面の事務局までご連絡ください。

(局長 増田知之)

◆事務局

修了などにより学籍を離れた方へ

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。「会員変更申込書」の提出により一般会員資格の付与などが行われますので、今春に学籍を離れた方は必ずご提出ください。

「会員変更申込書」は、学会ホームページからダウンロードできます。

なお、「会員変更申込書」下の「紹介会員氏名」「役員推薦氏名」「理事会承認」各欄の記入は不要です。書類送付やお問い合わせは、本紙2面所掲の事務局までお願い申し上げます。

学生会員から一般会員への変更届用
書学書道史学会変更申込書

私職 貴学会へ変更を申し込みます。 20 年 月 日

ふりがな:	氏名:			印
生年月日: 19 年 月 日生	年齢:	歳	性別(男・女)	
現住所:(〒)	(※通称のときは通称)			
TEL/Fax:	携帯:			
E-mail:				
最終:	大学	学部	学科	
	学部	専攻科	専攻	
前勤務・所属名 (任意で記入可)				
身分・役職名等				
現勤務・所属名				
身分・役職名等				
専 門 分 野:				
研究歴/発表誌/研究業績 (博士論文含む)				

(裏面使用可)

会員名簿発行に伴う情報提供のお願い

来年2月に会員名簿を発行する予定です。ご住所・ご所属・メールアドレス・会員種別等を確認するための用紙を9月にお届けする予定です。現時点で既に変更や修正がございましたら、本紙2面所掲の事務局までご連絡くださるようお願い申し上げます。

また、転居や所属の変更があった会員をご存じの場合は、本人に確認の上、事務局までお知らせいただけましたら幸いです。

令和7年度事業・活動計画(案)

本来ならば総会で承認を得るべきものですが、現段階での予定として、ここに示いたします。変更等の可能性もありますので、ご注意ください。

- 4月20日 第1回理事会(オンライン会議)
- 5月15日 第49号《会報》発行及び発送
- 6月1日 「研究促進助成金制度」申請受付(7日)
- 6月下旬 令和6年度決算会計監査
- 6月30日 第35回大会発表申込締切
- 7月13日 第1回常任理事会(オンライン会議)
- 8月下旬 2025年度例会(オンラインライブ配信)
- 9月下旬 第2回理事会(メール会議)
- 10月25日 《大会のしおり》《大会レジュメ集》発行及び発送
- 10月26日 第3回理事会(定例)(於奈良教育大学)
- 10月31日 令和7年度総会(於奈良教育大学)
- 12月上旬 第35回大会1日目(於奈良教育大学)
- 12月31日 第35回大会2日目(於奈良教育大学)
- 1月15日 第35号『書学書道史研究』発行及び発送
- 2月上旬 第4回理事会(メール会議)
- 2月下旬 第36号『書学書道史研究』投稿申込締切
- 2月28日 第50号《会報》発行及び発送
- 3月8日 第18期名簿・第19期役員選挙投票通知発送
- 3月22日 第19期役員選挙投票締切
- 3月31日 2026年度例会発表申込締切
- 3月31日 選挙選出理事による緊急懇談会
- 3月31日 第18期・第19期新旧役員合同理事会(オンライン会議)
- 3月31日 第36号『書学書道史研究』投稿原稿締切

(局長 尾川明穂)

談話室

日本の書をめぐって

金子 馨

MIHOMUSEUMで特別展「うつくしきかな」が開催中です。昭和の実業家・菅原通済（1894～1981）が再編した『ひぐらし帖』と呼ばれる31葉の古筆群（折帖装でなく軸装で構成される）を中心に古筆の名品が数多く展示されています。日本の書、とりわけ仮名の書はしなやかな線や造形、美しい料紙が魅力的ですが、本展では様々な趣向で仕立てられた表具も必見です。作品によって表情が異なり、ついっ

い時間を忘れて見入ってしまう。勤務先の出光美術館はビルの建て替えに伴って休館となりますが、今年は各地で日本の書の名品にお目にかかれそうです。五島美術館「極上の仮名」、根津美術館「はじめての古美術鑑賞―写経と墨蹟」、三井記念美術館「国宝 熊野御幸記と藤原定家の書」など、見逃せない展覧会が目白押しです。

日中西国における書跡修復材料について

孫 孺

日中の書跡修復における相違は、私にとって大きなテーマである。両国の差異は修復工程にも現れており、それは材料・技術・工具から理念に至るまで多岐にわたる。本稿では、特に紙、裂地、糊の3点に絞って

比較したい。

まず紙について。中国では本紙から裏打ち紙まで一貫して画仙紙が用いられるのに対し、日本ではおもに楮の剥皮繊維を原料とした美濃紙・宇陀紙・美栖紙が使用される。次に裂地について。中国ではシンプルなか綾が用いられることが多い。一方、日本では、より装飾性の高い金欄・銀欄・緞子などが好んで使用される傾向が見られる。最後に接着剤。日本では掛軸の増裏打ち・総裏打ちにおいて、接着力の調整のため、古糊が用いられるのに対し、中国ではこのような糊の調整は確認されない。

以上のような日中西国の相違は、それぞれの風土と文化を背景に独自に発展してきたことによるものだろう。

必要とされる書道教員として

直井 誠

勤務県の高校書道専門部会では、初任者に「勤務先で書道教員としての存在をアピールをするよう」と度々言われている。多くの素直な先生はコンクールと名のつくものに片端からたくさん出品し、上位賞を授かることが学校の名を挙げることに、ひいては自身の指導力と存在意義の誇示と考えて実践しているようだ。私はその方面の指導

力に欠けることを自認しているので、代わりに校内展示を多くし、表具は文化祭の廃材ベニヤや角材をパネルにして鳥の子でしつらい、出費も抑える。先頃の卒業式では映えスポットとして特大の卒業証書の看板を作成し、生徒や保護者から大好評だった。

何より同僚から「あなたが赴任して学校が中から変わった」と嬉しい言葉をいただいた。

筆技法だけでなく、書の周辺すべての知識や技術を発揮して職場の役に立つのが私なりの書道教員としての存在意義の頭し方である。紙切れ一枚の臍げな名誉より、本当に職場で必要とされる書道教員であり続けたいと思う。

未来へつなぐ日本の書

―万博における書道文化の挑戦―

福井 淳哉

2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）において、日本の書道の魅力を国内外に発信する特別企画「未来へつなぐ日本の書く空・海時を超えて」が実施される。本企画は、（公社）日本書芸院及び読売新聞社の主催、日本書道文化協会の協力の下、万博のテーマとの連携を図りつつ、書道の伝統と先端技術の融合等を目指す。

会場では、日本を代表する書家の作品や、伝統的な和室空間における書作品の展示に加え、先端技術を活用し、運筆を空間上に可視化する展示や、筆致を三次元映像として再構成する展示等、最新技術を駆使した多様な展示手法により、来場者に対し、五感を通じた新たな書の鑑賞体験を提供する。

本展示は、書に親しみのない層への本質的価値の理解促進を図り、書道文化の継承及び国際文化交流に資する取り組みとして、高い関心が期待されるだろう。

編集後記

◆何紹基の日記は複数確認されていますが、各本を収集し、系統的に整理した『何紹基日記』全4冊（岳麓書社出版社、2023）がこれまでの集大成となっており、簡便です。日記からは、張遷碑以外の漢碑の多習もわかりますが、各碑の臨書が何回目と逐一、記載しているその勤勉さにも頭が下がります。現存する作品との対照が今後の課題でしょうか。（高橋佑太）

◆4月から大東文化大学書道学科の専任教員として勤務することになりました。ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。会議、ゼミ、学科の行事など、初めて尽くしの毎日です。この新鮮な気持ちを大切に過ごしていきたいと思っております。（藤森大雅）

◆先日、本川越駅で催されていた古本市に行ってきました。書道関連の書籍も豊富に置かれています。印材や文房四宝等も安値で売られ出されておりました。たまたま出会った叔父様と文房四宝の話で盛り上がり、思いがけない墨縁を感じた日となりました。（村田 萌）

◆1970年の大阪万博の万国博ホール壁面には、村上三島、今井凌雪、梅舒適の巨大作品が貼り込まれ、多くの人びとの記憶に残りました。今回の万博の中国館にあしらわれた木簡風の書も印象的です。書は時代を超えて東アジア文化の礎となっていることを象徴しているようです。（高橋利郎）